様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２４１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０５４６

研究課題名（和文）旧薩摩藩都城および周辺域アクセントの現状と変化に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Present State and Change of Prosody in the Old Domain of Satsuma: Miyakonojo and the Surrounding Area.

研究代表者
松永　修一（Shuichi, MATSUNAGA）

十文字学園女子大学・人間生活学部・教授

研究者番号：４０３１２３１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では自然度の高い音声データ収集を行い、音調の世代差と変化の方向性を探索した。特に、若年層の自然談話の収集に力を入れ、その中で出現する方言語彙、アクセントなどを抽出し分析を行った。また、高校生100人に対して、伝統的方言の残存度、宮崎方言の浸透度、帰属意識、方言意識などの項目を調査した。また、都城市内の高校生、中年層、高年層の方々を対象に、自分たちの方言を考えるワークショップを都城市教育委員会との共催で開催した。自分たちの方言の多様性について考え、地域づくりのリソース、また、帰属意識の醸成のためにどのように活かせるかなどを考え、対話型の研究手法についても試行した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I collected speech data with a high degree of naturalness and searched for differences in generation of tone and the direction of change.
In particular, I focused on collecting natural discourse of young people, extracting dialect vocabulary and prosody appearing in it, and analyzed it.
I surveyed 100 high school students about the residual degree of traditional dialects, the degree of penetration of the Miyazaki dialect, the sense of belonging to their own area and the awareness of dialects. And, I held a workshop organized jointly with the Municipal Education Committee for high school students, middle-aged and elderly people in Miyakonojo City to think about the future of our dialect. We thought about the diversity of our dialects and thought about how to use dialects to create communities and foster sense of belonging. I also tried to develop an interactive research method.

研究分野：日本語学・方言学

キーワード：都城・諸県方言　尾高一型アクセント　高校生の方言　対話型調査　自然談話　ワークショップ　地域づくり

１．研究開始当初の背景

（１）尾高一型アクセント

方言音調としての都城方言アクセントは「尾高一型アクセント」として知られているが、当該地域の中年層・若年層における音調の地域差や現在の実相についてはまだ明らかにされていない。都城・諸県地方の方言音調の研究は、平山輝男の『九州方言音調の研究』（1951）に始まり、現在でも多くの日本語学の教科書に「都城、尾高一型アクセント」として取り上られているが、当初、平山氏は「都城の尻上がり音調」、「尻上がり一型」と呼んでいた。

（２）近年における都城方言の研究

都城方言音調の実相を、松永は「都城における韻律の変化について」（1994.10、日本方言研究会予稿集）において、音響分析を行いピッチの振れ幅に注目して論考した。その後、科研基盤研究（B）「鹿児島市とその周辺地域における地域共通語の実態とその教育に関する研究」（研究代表：木部暢子）の 1995 年の都城調査に参加するなど、当該地域の研究を継続的に進めてきた。N 型アクセントの研究が進む中、都城市アクセントも取り上げられるものの、都城市内のバリエーションや他の近隣地域の多人数を対象とした精密な調査は未だなされていない。近年の南九州、特に宮崎県方言の全県的な言語地図化は、『宮崎県言語地図集』（1998）宮崎国際大学（岸江・松永その他）、『宮崎県方言世代別分布地図』（研究代表：松永）(2000)と行われてきた。

『宮崎県言語地図集』は岸江主宰のもと松永も参加し宮崎国際大学地域言語研究会の学生と調査を行いまとめたものである。調査期間 1995～1998 年、70 歳以上の生え抜きを対象とした 110 地点を文法、語彙、言語意識項目について対面による臨地調査を行った。言語地図化における記号化はすべて手作業で行い 170 枚を完成させた。「宮崎県方言世代別分布地図」は 1998 年度から 1999 年度までの科研基盤研究（C）（研究代表：加藤正信（1998）、松永修一（1999））「宮崎県における在来方言の確認および現在の実態・意識に関する研究」の成果の一部である。1999 年 12 月から 2000 年 1 月まで加藤正信氏（当時、宮崎大学）主導のもと、松永と宮崎大学大学院生が、県内中学宮崎県下の若年層（中学生）と 40 代前後の中年層（その父兄）を対象として通信調査を行った。この調査では語彙・語法・音韻などの項目の使用度、馴染み度といった 49 項目を確認するものである。 県内 130 中学に依頼し 104 地点からの回答を得た。通信調査で回答が得られなかった地域は松永が臨地調査を行った。収集したデータは松永がコンピューターによって言語地図化し 62 葉を『宮崎県方言における世代差・地域差の研究』の中に所収した。

（３）都城方言音声データベース化

科研基盤研究(C) 2001～2002 年度（研究代表：木部暢子)「データベースによる音声言語地図の開発・ 作成に関する研究」では松永・岸江、共に研究分担者として「南九州声の言語地図」を作成した。科研基盤研究(B)2003～2005（研究代表:木部暢子)「『声の言語地図』のネットワーク化と『映像の言語地図』開発に関する研究」で研究分担者として参加し、臨地調査を行った。それぞれのプロジェクトでは、広域の調査研究であったので当該地域の調査は行ったのは、1 地点のみであった。

（４）音声資料の新たな価値付け

30 数年間の調査は、カセットテープでの録音から始まり、MD、DAT、HD 録音機と様々なメディアを用いた研究に変化してきた。収集した資料の大半はインフォーマントの高齢化やお亡くなりになったため、再調査不可能なものばかりであるが、実際に資料として用いているのは調査項目のみで、その他の偶然の発話や様々な雑談は埋もれてしまっているのが現状である。この使われずに埋もれてしまった資料の中には貴重な言語情報を含むものが多く存在することが、科研基盤研究（C）「19･20 世紀東京弁録音資料のアーカイブ化」（研究代表：秋永一枝）の中で分担者として明らかにしてきた。

科研基盤研究（C）2009～2012「南九州方言マルチメディア資料アーカイブスおよびデータベース構築に関する研究」（研究代表：松永修一）では、これらの録音資料の劣化を防ぐためにデジタル化をし、更に、埋もれてしまっている貴重な資料の再発掘、つまりアーカイブス、データベース構築のため試行を行った。その過程で、新たな言語情報の抽出と集積、分析を目指すとともに、自然談話資料として、プロソディ研究の有用な資料として生き返えらせることも可能になることも検証できた。

２．研究の目的

（１）国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」（研究代表：大西拓一郎）では当該地域の調査を研究協力者として担当したが、限られた調査地点とインフォーマントの数は満足に足るものではなかった。当該地域だけの集中的かつ網羅的な調査はまだない。加えて、中年層、若年層のデータ分析も少ない。本研究では、伝統的な方言調査の技法である対面式の臨地調査を大切にする。基本に戻った丁寧な調査から質の高い言語データは得られると考えるからである。自然度の高い音声データ収集・音響分析を行い、音調の世代差と変化の方向性を明らかにする。更に、音声データベース化し、音声資料として一般公開への基礎資料作りを企図するものである。

（２）次に、地元の方言集を作成されている

ような地域の研究家の方々の情報交換や勉強会の開催や、方言を地域振興のための文化資源としての位置づけ、アイデア共有など地域貢献の役割も意識した研究にすることを目標とした。成果は、言語研究者の共有の資料として公開するのみならず、小中学校の総合学習の教材として提供できるよう工夫し、その方言資料の利用法・授業プランの提供、近年盛んになっている生涯教育のプログラム開発にも協力できる。方言研究の成果を文化的遺産と地域づくりのリソース化も意識した研究を目指した。

３．研究の方法

（１）平成 26 年度は主に都城市（旧市内）を中心に臨地調査を行った。中年層、若年層に対する臨地聞き取り調査では、宮崎県都城市 …（中心部）上長飯町、東町、姫城町など５地点（周辺域）郡元町、沖水町、志和地など５地点（旧市外）山田町、高崎町など 10 地点 調査項目は語彙、音声などの、100 項目録音・録画による記録を行った。科研基盤研究（C）1998 年度～1999 年度（研究代表:加藤正信（1998)、松永修一（1999)「宮崎県における在来方言の確認および現在の実態・意識に関する研究」、科研基盤研究(C)2001～2002 年度（研究代表:木部暢子）「データベースによる音声言語地図の開発・作成に関する研究」での知見による手法を利用し、調査項目もこれらの研究成果を利用して決定した。
当該地域は旧薩摩藩域であり、子ども達のコミュニティーで年長者が下のものに教えながら成長していくという独特の郷中（ごじゅう）教育システムが多くの地域に存在していたことに注目し、自然談話の共通話題として聞き取りを行った。また、若年層調査では高校生を対象とした聞き取り調査と音声サンプルの聴覚実験を行い、当該方言のピッチパターンの自由度がどこまで許容されるかを確認した。若年層に関しては宮崎市方言の影響を大きく受けていると予想していたが、その度合いは、使用語彙の多人数調査を併せて行いながら明らかにしようとした。

（２）平成 27 年度は都城市（旧市内+旧市街）とその周辺域の残りの地域の調査をおこなった。8 月～9 月の調査地点としては宮崎県都城市 、（中心部）妻ヶ丘町、蔵元町など５地点、（周辺域）梅北町、志比田町、庄内町など５地点（旧市外）高城町、山之口町、三股町など 10 地点、鹿児島県曽於市（旧財部町・末吉町）など 15 地点をめざした。同様に、継続して若年層調査では高校生を対象とした聞き取り調査は、都城泉ヶ丘高校、都城農業高校に依頼をした。

（３）平成 28 年度は、最終のデータ整理をする中で再調査（臨地調査）が必要となった地点に合わせ調査のスケジュールを調整し、9 月には都城での宮崎県下の一般の地元方言収集家を招いたシンポジウム開催を計画した。これらのシンポジウムは宮崎県教育庁文化財課、都城市教育委員会の後援で予定した。最終年度として、学会発表など成果の一部のデータを示しながら報告するとともに、前述のシンポジウムのほか、小・中学校教員向けに方言資料を使った授業モデルの講習会を企画した。

４．研究成果

（１）音声データは、対面調査により、語彙項目、文法項目、音韻項目、言語意識項目の大きく４つの部門に分けて聞き取りを行った。特に今までの研究では少なかった中年層のデータ・若年層データは、調査項目の他に同世代同士の自然談話の収集に力を入れた。都城市とその周辺域の地域の調査地 50 地点、高校生は 40 名の音声録音を完了した。特に自然談話の音声収集では、女子生徒同士の自然談話（いわゆるガールズトーク）の録音を述べ 20 時間おこない、その中に出現する方言語彙、アクセントなど特徴的なものを切り出し、分析を行った。外来語のアクセントについては、ほぼ 100%尾高型で発音されることが分かった。ピッチ幅も高年層＞中年層＞若年層と狭くなっていることがわかった。宮崎市や延岡などの県北の方言話者が持つ都城・諸県方言に対するイメージは、音調のアップダウンが激しいというものなのだが、この特性は少しずつなくなりつつあるようだ。この音調特性の変化の要因は何か、今後の課題となりそうである。

（２）最終年度は、30 年前から行っている経年調査でもある都城市内の高校生 100 人に、伝統的方言の残存度、宮崎方言の浸透度、地域に対する帰属意識、方言に対する好悪意識などの項目について、アンケートによる調査を行った。20 年前の「さつまいも」の方言形の「唐芋（からいも）」の使用率は 9 割程度あったが、現在の使用度は約半分に減少していた。伝統方言の使用度については全体的に下がっているが、男女差があるものも観察された。その中でも最も大きかったのが、宮崎方言の中では使用度が高いと思われている、強調を表す「てげ＝とてもの意味」は、男女差も大きく（R=.313)、予想をはるかに上回る結果となった。30 年ほど前に一気に広がった首都圏の若者ことばである「超～」の拡散の勢いに阻まれ、宮崎市から伝播してきていた方言「てげ」は都城には侵入・定着することができなかったと考えられる。
また、20 年ほど前から宮崎市を中心に広がった新方言「こっせん」（～じゃない？と同意を求める表現）「かわいいこっせん＝かわいいよね」は都城では浸透しなかったこともわかった。これは、同時代に首都圏から広がった「飛び跳ねイントネーション」と同じ機能だったため、新興の方言語彙である「こっせ

ん」は負けたものと思われる。

			てげ（使用度）				
			よく使う	まあまあ使う	どちらでもない	あまり使わない	全く使わない
男女	男	度数	3	9	5	11	23
		男の %	5.9%	17.6%	9.8%	21.6%	45.1%
	女	度数	1	3	3	7	46
		女の %	1.7%	5.0%	5.0%	11.7%	76.7%
合計		度数	4	12	8	18	69
		男女の %	3.6%	10.8%	7.2%	16.2%	62.2%

（表１:てげの使用度×男女のクロス表）

（３）最終年度は、都城市内の高校生 20 名、中年層 10 名、高年層 10 名の方々に集まっていただき、自分たちの方言を考えるワークショップを行った。ワークショップは都城市教育委員会の後援で開催した。内容は、2 部制にして、初めに当該地域の方言の特徴と、自分たちの方言の多様性について、松永より情報提供を行った。次いで、宮崎国際大学国際教養学部教授のデボラ・オチ氏から外国人から見た宮崎における方言文化の魅力についてレクチャー頂いた。2 部では、グループに分かれ、「20 年後、子どもたちから年配者まで全ての市民が豊かな方言を使って生きている社会が実現しているとしたら、どのような変化が起きているか」を参加者全員で考え、地域資源としての方言に対する意味付け・価値付けを行い、地域づくりのリソース、また、帰属意識の醸成のためにどのように活かせるかなどを考え、プレゼンテーションまで行った。
全グループ発表の後、多くの参加者から継続的な取り組みとしてワークショップを開催してほしいとの要望があり、今後、都城教育委員会主催で、年３回程度、継続的に開催することになり、次年度の開催計画まで練られた。単に方言について語るだけではなく、方言を用いた地域づくりへのアクションへと繋げていこうとするものである。
アカデミックな領域に留まらず、積極的に市民・行政を巻き込んだ活動へと導き、継続的にサポートする役割も果たせる可能性を示唆する。方言をまちづくりに活用した事例として宮崎県小林市のものが挙げられることが多いが、この活動は行政から発信のものだったが、現在は市民が自律的に行う活動へ広がり、深まっている点に注目したい。
本研究を遂行するにあたり、他分野の研究者との学際的な連携の可能性も見えてきた。この点は、方言に関わる新しい研究領域として、今後広げていければと考えている。また、本研究では対話型の調査手法にこだわり、試行を重ねてきたが、今後も更に深め、調査者、被調査者の両者にとって well-being で在ることを志向したい。
また、少子高齢化と過疎化で疲弊する中山間地域のコミュニティー再生の一助として、専門領域の異なる研究者や市民の方々との情報共有も進めていく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　３　件）
①　岸江信介,<u>松永修一</u>,24Conducting Research on the　Geographical Linguistics by utilizing the dataComprising Twitter, New Ways of Variation Asia Pacific 4（国際学会）,
2016 年 04 月 23 日，台湾中正大学　（嘉義市，台湾）

②　<u>松永修一</u>,Learning Japanese A PBL experience at　University in a Japanese mountain village community,
2016 AJE ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）,
2016 年 7 月 8 日,Ca'Foscari University of Venice(Venice,Italy)

③　<u>松永修一</u>,女子大学生と地域住民との協働による地域づくりの試み,
第 64 回日本農村生活研究大会,
2016 年 10 月 15 日,十文字学園女子大学（新座市,埼玉県）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
松永　修一（MATSUNAGA, Shuichi）
十文字学園女子大学・人間生活学部・教授
研究者番号：４０３１２３１８